

大学生の社会的自己制御と適応感の関連 — 自尊心と被受容感における特徴から —

内田 利広・福本 紘未*

Social Self-Regulation and adjustment of University Students :
Features Self-esteem and Sense-of-Acceptance

Toshihiro UCHIDA and Hiromi FUKUMOTO

Accepted June 17, 2015

抄録：本研究の目的は、大学生の社会的自己制御と適応感（自尊心及び被受容感・被拒絶感）の関連を明らかにするとともに、社会的自己制御を高める要因を検討することである。大学生 242 名を対象に質問紙調査を行った。結果は以下の通りである。(1) 被受容感を得ている人は自尊心に関係なく、社会的自己制御が高い。(2) 特定他者からの被受容感を得ている人は自己主張および持続的対処・根気が高い。(3) 被拒絶感の低い人は持続的対処・根気および感情欲求抑制が高い。

これらの結果から、社会的自己制御を高めるためには被受容感（特に特定他者からの被受容感）を高める必要性があること、また、被拒絶感を低める必要性があることが示唆された。

索引語：社会的自己制御、適応感、自尊心、被受容感

Abstract : The purpose of this study is to examine factors to enhance Social Self-Regulation through clarifying the relationship between the Social Self-Regulation and the adjustment (self-esteem, Sense of Acceptance and Rejection) among university students. 242 university students were asked to respond to a questionnaire. The main results are as follows. : (1) Students who have high Sense of Acceptance also have high Social Self-Regulations regardless of self-esteem. (2) Students who have high Sense of Acceptance from specific individuals also have high self-assertiveness and patience or endurance. (3) Students who have low Sense of Rejection have high patience or endurance and emotion/desire suppression.

These results suggest necessities for both enhancement of Sense of Acceptance (especially from specific individuals) and lowering of Sense of Rejection .

Key Words : Social Self-Regulation, adjustment, self-esteem, Sense-of-Acceptance

* 広島大学大学院教育学研究科 教育研究補助職員

1. 問題と目的

近年、認知・感情・行動を適切に制御できない「キレる若者」の増加が報道等でも取り上げられている。こうした自己を制御できない問題に関して、これまでの研究では、自己制御や自己統制という語を用いて多様な検討が行われてきた。自己制御、自己統制いずれの語を用いるのかは研究者によって異なるものの、先行研究は一貫して、自己制御・自己統制の低さが、学業成績の低さや不安・抑うつ傾向、犯罪行為に至るまで多岐にわたる問題行動へと繋がることを報告している (e.g., 河野・岡本, 2001)。自己制御と自己統制の違いについては、自己統制が抑制・制止の側面を強調する語として用いられるのに対し、自己制御には、行動抑制の側面だけでなく行動始発の側面も含まれているとされる (Schmeichel & Baumeister, 2004)。自己を表出する場面でも抑制し、常に自己抑制的に振舞うといった抑圧が続いた結果が、突然攻撃的な態度を表出する「キレる」現象に結びついているといった指摘もあり、行動始発の側面、すなわち自己主張的側面を抑制とともに身につけることの重要性を主張する研究も見られる (佐藤, 2003)。そこで本研究では、自己主張的側面と、自己抑制的側面の2側面から構成され、「社会的場面で、個人の欲求や意思と現状認知との間でズレがおこった時に、内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは制御する能力 (原田・吉澤・吉田, 2008)」と定義される社会的自己制御 (Social Self-Regulation ; 以下 SSR) に着目し、その関連要因を検討することを目的とする。

「対人関係を円滑にすすめる具体的行動」という点で社会的スキルの概念に包含される社会的自己制御だが、社会的スキルに関連する要因の一つとして、適応感がある。適応には、精神内界の安定を得ることによって環境に適合しようとする内的適応と、他人から容認され、人間関係のなかで安定を得ようとする外的適応がある。適応感と社会的スキルの関連について、自己の全般的な価値の感覚を指す概念であり、内的適応を示す概念として多くの先行研究で用いられている「自尊心」の低い者は、自尊心を保てないために他者からのケアを求める欲求が高まり、不適切な社会的スキルを用いること (寺島ら, 2007) や、他者の中にあつての純粋な安心感に近いような概念 (杉山, 2002; 杉山・内田, 2004) であり、外的適応を指すとされる「被受容感」を十分に感じていない者は、自分の社会的スキルが不適切であると認識していること (鈴木, 2005) などが示されている。しかし、こうした適応感と社会的スキルの関連を明らかにする研究の多くが、社会的スキルの自己主張的側面、もしくは自己抑制的側面のどちらかに特化したものであること、また、社会的自己制御に関する研究の多くが幼児期を対象とし、問題行動の顕在化する青年期を扱っていないことから、本研究では青年期における社会的自己制御と適応感の関連を明らかにすることを目的とする。さらに、社会的スキルの獲得に影響を与えるとされる対象者の属性として、多くの先行研究がきょうだい構成との関連を明らかにしている (e.g., 相川, 2010) ことから、きょうだい構成によって、社会的自己制御に差が有るのかということも合わせて検証することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者

大学生 242 名 (男性 100 名, 女性 142 名 ; 平均年齢 19.8 歳, $SD = 1.41$) から回答を得た。

(2) 質問紙の構成

- 1) 対象者の属性：年齢、性別、きょうだい構成（出生順位・兄弟姉妹の数）
- 2) 自尊心尺度：1 因子から構成される自尊心尺度（Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982 による邦訳版）10 項目を用いた。「あてはまらない」から「あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。
- 3) 被受容感・被拒絶感尺度：「被受容感」13 項目「被拒絶感」9 項目の 2 因子計 22 項目から成る被受容感・被拒絶感尺度（杉山・坂本, 2006）を用いた。「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。
- 4) 社会的自己制御尺度：「自己主張」13 項目「持続的対処・根気」7 項目「感情・欲求抑制」9 項目の 3 因子計 29 項目からなる社会的自己制御尺度（原田・吉澤・吉田, 2008）を用いた。「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

(3) 手続き

質問紙への回答は無記名による集団形式で行われた。

3. 結果

(1) 因子分析

杉山・坂本（2006）が作成した被受容感・被拒絶感尺度を用いて調査を実施したが、因子構造は杉山らとは一部異なる結果となった（Table1）。第 1 因子は杉山らの「被拒絶感」因子と同質であったが、

Table1 被受容感・被拒絶感尺度の因子分析結果（主因子法・Promax 回転）

項目内容		I	II	III
I 被拒絶感($\alpha=.874$)				
17	調子が悪いとだれもが私のもとを去っていく	.823	-.051	.088
15	私はよく人からないがしろにされる	.768	.004	-.015
6	だいたいの人は私につらくあたるだろう	.739	-.070	.133
13	私は悪く思われがちだ	.732	.037	-.048
12	とかく無視されることが多い	.603	-.178	.124
21	私はよく批判される	.576	.162	-.168
20	少しでもうまくいかないとき、私は見捨てられるだろう	.557	-.162	-.061
4	私は普段人から背を向けられている	.487	-.029	-.190
9	他人は私に愛想をつかすかもしれない	.468	.289	-.262
II 特定他者からの被受容感($\alpha=.817$)				
11	私に会うのを喜んでくれる人がある	.000	.735	-.018
10	だれか私に優しくしてくれる人がある	-.081	.719	-.072
19	私には頼りになる人がある	-.018	.614	-.012
16	私は人から支えられている	-.108	.610	-.067
14	だれか思い出して胸が暖かくなることがある	.105	.584	.005
8	私は人に守られている	.125	.504	.303
18	私が行くと喜ばれる場がある	.026	.440	.261
III 特性的被受容感($\alpha=.820$)				
3	私はたいてい受け容れられている	.013	.030	.774
22	私はたいていの場で認められている	-.155	-.094	.689
5	私は信頼されている	.025	-.075	.657
7	たいてい人は私に快く応えてくれる	-.052	.141	.519
2	私は理解されている	.030	.222	.471
1	私は人並みには大切にされている	-.050	.256	.451
因子間相関		I	II	III
I		—	-.460	-.580
II			—	.544
III				—

第2, 第3因子は, 杉山らの結果の「被受容感」因子が, 「私に会うのを喜んでくれる人がいる」「私には頼りになる人がいる」など, 「…な人がいる」というように, 現在の受容してくれる他者の有無に関する項目と, 全般的で特性的な被受容感に関する項目の2つに分かれる結果となった。そこで前者を「特定他者からの被受容感」因子と命名し, 後者を「特性的被受容感」と命名した。

さらに, 原田・吉澤・吉田(2008)が作成した社会的自己制御尺度を用いて調査を実施し, 因子分析を行ったところ, 原田らと同じ「自己主張」($\alpha = .831$)「持続的対処・根気」($\alpha = .793$)「感情欲求抑制」($\alpha = .771$)の3因子が抽出された(Table2)。

Table2 社会的自己制御尺度の因子分析結果(主因子法・Promax 回転)

項目内容		I	II	III
I 自己主張(α=.831)				
6	多数派の意見とは違っても自分の意見を言う	.730	-.121	.107
13	友達の考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる	.665	.076	.101
23	たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘できる	.661	.022	-.038
1	周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する	.644	-.114	.026
20	話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる	.556	.152	-.060
15	自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う	.545	.032	.151
4	順番に並んでいるときに横から入り込んでくる人がいたら注意をする	.543	-.024	-.233
2	先生から不当なことを言われても黙っている	.542	-.056	-.112
17	嫌なことを頼まれたとき、嫌だという気持ちを伝えることができる	.531	-.086	-.038
24	自分が正しいと思っていることでも、人から「間違っている」といわれる可能性があるときは何も言わない *	.404	-.061	.103
II 持続的対処・根気(α=.793)				
28	周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、我慢してやりとおす	-.011	.740	-.023
27	やりとおさねばならない仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる	.040	.725	-.023
22	やりたくないことや興味のないことは、皆と一緒にやらなければならないときでもサボってしまう *	-.117	.591	-.063
19	集団の中で、自分の決められた役割があるときは、どんな誘惑にも負けずに取り組む	-.014	.566	.099
21	困難なことでも集中して取り組む	.171	.560	.024
10	面倒くさいことは人に押し付ける *	-.162	.518	.107
5	皆でやるべき課題があるときは、遊びたい衝動に駆られても我慢できる	-.082	.513	.012
III 感情欲求抑制(α=.771)				
16	納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる	.208	-.086	.714
18	嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない	.003	.024	.608
7	自分の思い通りに行かないと、すぐに不機嫌になる *	-.089	.024	.597
11	自分がされて嫌なことは人にもしない	-.054	-.007	.537
25	相手から不快なことを言われても自分の感情を露骨に表したりはしない	-.232	-.034	.511
12	友達から間違いを指摘されたら、素直に自分が間違っていたことを認める	.134	.034	.498
3	自分が気にいらない人には、つい過剰に注意をしたり、文句を言いつぎたりしてしまう *	-.327	.056	.470
14	自分の考えだけを聞いてもらおうとするのではなく、相手の考えも聞いて、分かってあげようとする	.269	.134	.456
因子間相関		I	II	III
I		—	.308	.100
II			—	.408
III				—
削除項目	8 仕事・課題や遊びなど、周囲の人にいちいち聞かずに、自分のアイデアで進めることができる	*: 逆転項目		
	9 やりたいことに自分から進んで参加できる			
	26 自分の意見を否定する相手の意見を受け入れることができない *			
	29 友達が嫌がらせや悪ふざけなどをしているときでも、よくないと伝えることができない *			

(2) 対象者の属性による自尊心, 被受容感・被拒絶感, 社会的自己制御の差 (t 検定・1 要因分散分析)

t 検定によって性差を検討した結果, 男性の方が女性よりも被拒絶感の得点が有意に高く, 女性の方が男性よりも被受容感の得点が有意に高いことが示された。また, 男性の方が女性よりも自己主張の得点が有意に高く, 女性の方が男性よりも持続的対処・根気の得点が有意に高いことが示された (Table3)。

Table3 男女別平均値と標準偏差 (SD) および t 値

	男性 (100人)			女性 (142人)		t 値
		(SD)			(SD)	
自尊心	3.29	(0.38)		3.30	(0.34)	-0.14
特定他者からの被受容感	3.86	(0.63)	<	4.11	(0.53)	-3.34**
特性的被受容感	3.43	(0.56)	<	3.63	(0.52)	-2.87**
被拒絶感	2.58	(0.63)	>	2.35	(0.64)	2.81**
自己主張	3.22	(0.60)	>	3.01	(0.63)	2.57*
持続的対処・根気	3.29	(0.62)	<	3.52	(0.64)	-2.89**
感情・欲求抑制	3.49	(0.65)		3.56	(0.51)	-0.84

* $p < .05$ ** $p < .01$

さらに, t 検定及び 1 要因分散分析によってきょうだい構成における差を検討したところ, 中間子一人っ子よりも特定他者からの被受容感の得点が高く, 長子は末子よりも感情欲求抑制の得点が高かった (Table4)。また, きょうだい数が 3 人以上だと一人っ子よりも特定他者からの被受容感の得点が高く (Table5), 異性きょうだいのいない人はいる人よりも自己主張が高いことが分かった (Table6)。

Table4 出生順位別の平均値と標準偏差 (SD) および 1 要因分散分析の結果

	長子 (116人)	中間子 (36人)	末子 (67人)	一人っ子 (23人)	F 値	多重比較
自尊心	3.29(.36)	3.34(.40)	3.30(.33)	3.20(.39)	.70	
特定他者からの被受容感	3.99(.57)	4.18(.58)	4.02(.56)	3.76(.66)	1.90*	中間子 > 一人っ子
特性的被受容感	3.49(.53)	3.69(.55)	3.60(.56)	3.41(.55)	1.64	
被拒絶感	2.44(.63)	2.25(.65)	2.54(.70)	2.47(.53)	2.57	
自己主張	3.06(.68)	3.04(.59)	3.21(.58)	3.08(.45)	1.01	
持続的対処・根気	3.38(.62)	3.43(.66)	3.56(.67)	3.27(.58)	1.63	
感情・欲求抑制	3.61(.58)	3.60(.45)	3.38(.63)	3.47(.44)	2.57*	長子 > 末子

* $p < .05$

Table5 きょうだい数別の平均値と標準偏差 (SD) および 1 要因分散分析の結果

	1人 (23人)	2人 (132人)	3人以上 (87人)	F 値	多重比較
自尊心	3.20(.39)	3.32(.34)	3.28(.38)	1.21	
特定他者からの被受容感	3.76(.66)	3.99(.56)	4.08(.59)	2.92*	3人以上 > 1人
特性的被受容感	3.41(.55)	3.50(.54)	3.64(.55)	2.25	
被拒絶感	2.47(.53)	2.47(.65)	2.40(.67)	.30	
自己主張	3.08(.45)	3.11(.64)	3.09(.64)	.22	
持続的対処・根気	3.27(.58)	3.44(.62)	3.44(.69)	.72	
感情・欲求抑制	3.47(.44)	3.50(.60)	3.60(.56)	.95	

* $p < .05$

Table6 異性きょうだいの有無別平均値と標準偏差 (SD) および t 値

	あり			なし		
	(142人)			(100人)		
	(SD)			(SD)		<i>t</i> 値
自尊心	3.30	(0.36)		3.28	(0.37)	0.39
特定他者からの被受容感	3.97	(0.54)		4.05	(0.65)	-1.16
特性的被受容感	3.55	(0.53)		3.54	(0.57)	0.08
被拒絶感	2.46	(0.61)		2.42	(0.70)	0.44
自己主張	3.04	(0.61)	<	3.19	(0.64)	-1.86†
持続的対処・根気	3.43	(0.64)		3.42	(0.65)	0.09
感情・欲求抑制	3.57	(0.55)		3.48	(0.60)	1.21

†*p* < .10

† $p < .10$

(3) 自尊心および被受容感・被拒絶感と社会的自己制御との関連 (3 要因分散分析)

因子分析によって2つの異なる被受容感の存在が明らかとなったことから、特定他者からの被受容感、特性的被受容感、被拒絶感と社会的自己制御の間にどのような関係があるのかを検討するために3要因分散分析を行った (Table7)。

次に、自尊心が低く、被受容感が高い人は、自尊心が高く、被受容感が低い人よりも社会的自己制御が高いのではないかという仮説を検討するために3要因分散分析を行った (Table8)。

その結果、仮説は棄却されたが、被受容感の中でも特定他者からの被受容感高群は低群より自己主張、持続的対処・根気が高かった (figure1,2)。さらに、被拒絶感低群は高群よりも持続的対処・根気、感情欲求抑制が高かった (figure3,4)。

また、特定他者からの被受容感高群の中で、特性的被受容感高群は低群よりも自己主張、感情欲求抑制が高かった (figure5,6)。(特性的被受容感高群の中で、特定他者からの被受容感高群は低群よりも自己主張、感情欲求抑制が高かった。)

Table7 特定他者からの被受容感、特性的被受容感、被拒絶感における社会的自己制御各下位尺度の平均値、標準偏差および分散分析結果

特定他者からの 被受容感	低群				高群				主効果			一次の交互作用			二次の交互作用	
	低群		高群		低群		高群		特定他者 からの 被受容感	特性的 被受容感	被拒絶感	特定他者 ×特性的	特定他者 ×被拒絶感	特性的 ×被拒絶感	特定他者×特性的 ×被拒絶感	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群								
被拒絶感	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群								
	(N=19)	(N=62)	(N=28)	(N=14)	(N=17)	(N=22)	(N=58)	(N=22)								
自己主張	2.93	3.03	2.99	2.76	2.81	3.17	3.34	3.31	6.97**	1.81	.33	6.42*	1.72	4.26*		.03
SD	.59	.53	.66	.45	.82	.58	.64	.51								
持続的対処・根気	3.43	3.17	3.45	3.13	3.44	3.22	3.82	3.46	4.64**	2.96	10.68**	3.31	.00	.32		.06
SD	.67	.55	.58	.50	.57	.61	.63	.68								
感情欲求抑制	3.77	3.29	3.64	3.19	3.57	3.3	3.82	3.51	.91	.51	23.33***	4.84**	1.30	.01		.05
SD	.49	.55	.54	.52	.57	.48	.54	.53								

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table8 自尊心、被受容感、被拒絶感における社会的自己制御各下位尺度の平均値、標準偏差および分散分析結果

	自尊心		低群				高群				主効果			一次の交互作用			二次の交互作用
	被受容感 被拒絶感		低群		高群		低群		高群		自尊心	被受容感	被拒絶感	自尊心 ×被受容感	自尊心 ×被拒絶感	被受容感 ×被拒絶感	自尊心×被受容 感×被拒絶感
			低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群							
			(N=21)	(N=39)	(N=39)	(N=7)	(N=12)	(N=47)	(N=50)	(N=27)							
自己主張			2.89	3.08	3.23	3.26	3.03	2.95	3.16	3.23							
	SD		.62	.53	.70	.52	.55	.55	.73	.54	.04	5.46*	.30	.07	.39	.00	.65
			3.24	3.20	3.63	3.27	3.45	3.12	3.81	3.46							
	SD		.70	.59	.58	.63	.51	.49	.62	.68	1.80	9.35**	8.41**	.39	.57	.84	.64
感情欲求抑制			3.67	3.23	3.71	3.05	3.68	3.35	3.79	3.46							
	SD		.55	.54	.54	.45	.54	.52	.54	.55	3.24	.06	26.54***	1.18	1.68	.43	.40

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

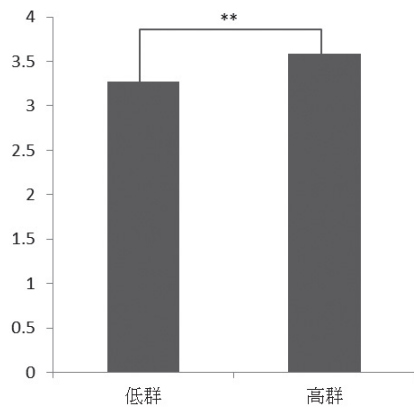


Figure1 特定他者からの被受容感（高低）における持続的対処・根気得点

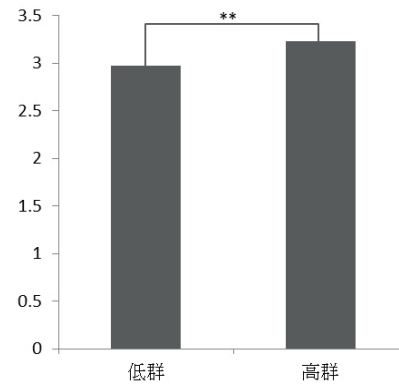


Figure2 特定他者からの被受容感（高低）における自己主張得点

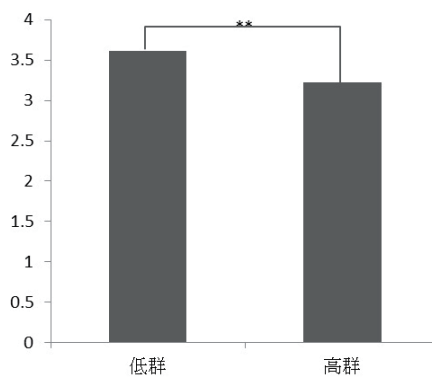


Figure3 被拒絶感（高低）における持続的対処・根気得点

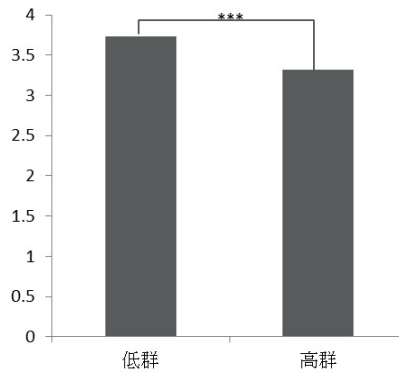


Figure4 被拒絶感（高低）における感情欲求抑制得点

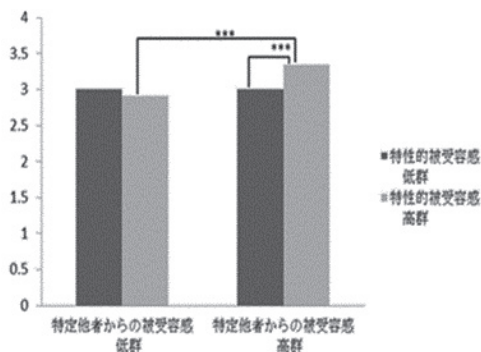


Figure5 特定他者からの被受容感×特性的被受容感における自己主張得点

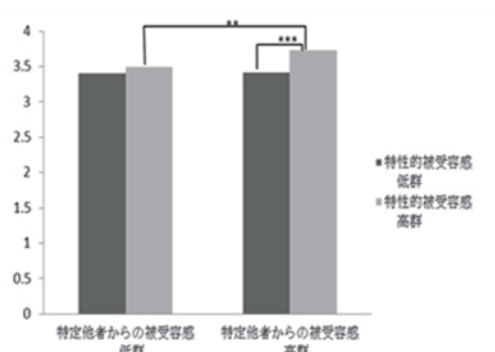


Figure6 特定他者からの被受容感×特性的被受容感における感情欲求抑制得点

4. 考察

(1) 因子分析

1) 被受容感・被拒絶感尺度

本研究では、杉山・坂本（2006）が作成した被受容感・被拒絶感尺度を用いて調査を実施したが、因子構造は杉山らとは一部異なる結果となった。第1因子は杉山らの「被拒絶感」因子と同質であったが、第2、第3因子は、杉山らでの「被受容感」因子が、現在受容してくれる特定の他者の有無に関する項目と、全般的で特性的な被受容感に関する項目の2つに分かれる結果となった。そこで前者を「特定他者からの被受容感」因子と命名し、後者を「特性的被受容感」と命名した。杉山らの研究では、被受容感を「自分は他者に大切にされているという認識」として一義的にしかとらえていなかったが、本研究において、被受容感には異なる2つの側面があることが明らかとなった。特定他者からの被受容感は、家族や友人、先生、恋人といった具体的な他者に、一定の理解やあたたかさ、承認を持って大切に扱われ、支えられているという認識であり、こうした被受容感は特定の他者から肯定的なサポートを受けた経験からもたらされるものであると考えられる。それに対し、特性的被受容感は、場面や状況、人物を超えてどの程度まで被受容感が般化するかという次元であり、特性としての被受容感の一般的傾向を説明するものである。したがって、特定他者からの被受容感と特性的被受容感は重なる面も多いと考えられるが、両者は異なる次元のものであると言える。このことは、社会的自己制御の不十分な人に対する心理的援助を考える際、より具体的にどちらの被受容感にアプローチするのが効果的であるかといった視点をもたらし上でも重要だろう。

2) 社会的自己制御尺度

本研究では、原田・吉澤・吉田（2008）が作成した社会的自己制御尺度を用いて調査を実施し、因子分析を行ったところ、原田らと同じ3因子が抽出された。原田らで出された第1因子「自己主張」、第2因子「持続的対処・根気」、第3因子「感情欲求抑制」が、本研究においても第1因子、第2因子、第3因子にそれぞれ抽出されており、信頼性係数も原田ら（2008）では、第1因子（ $\alpha = .85$ ）、第2因子（ $\alpha = .77$ ）、第3因子（ $\alpha = .74$ ）に対して本研究では第1因子（ $\alpha = .83$ ）、第2因子（ $\alpha = .79$ ）、第3因子（ $\alpha = .77$ ）と似た値が出された。このことからこの3つの因子に関して内的整合性が高いと言える。

一方、本研究での因子分析による削除項目は「仕事・課題や遊びなど、周囲の人にいちいち聞かずに、自分のアイデアで進めることができる」、「やりたいことに自分から進んで参加できる」、「自分の意見を否定する相手の意見を受け入れることができない」、「友達が嫌がらせや悪ふざけなどをしているときでも、よくないと伝えることができない」の4項目となり、これは原田ら（2008）とは異なる結果であった。考えられる要因として、対象者の違いが挙げられる。つまり、本研究で対象とした大学生は教員志望者が多く、原田ら（2008）が対象とした大学生とは規範意識や将来志向性に多少の相違があり、そのことが社会的自己制御尺度に影響を与えたのではないかと推測される。

(2) 対象者の属性による自尊心、被受容感・被拒絶感および社会的自己制御の差についての検討

1) 性別

*t*検定の結果、男性の方が女性よりも被拒絶感の得点が有意に高く、女性の方が男性よりも被受容感の得点が有意に高いことが示された（Table3）。この結果は先行研究である杉山・坂本（2006）の

報告とも一致しており、被受容感・被拒絶感の高さには性差が認められることが明らかとなった。男性の方が女性よりも被拒絶感が高く、女性の方が男性よりも被受容感が高い要因として、男性はソーシャルサポートを受けにくく、女性は受けやすい（和田，1998）ということが考えられる。つまり、男性は援助の受けにくさから、他者に疎まれている、ないがしろにされているといった被拒絶感を高く感じており、女性は援助を受けやすいために、自分は他者に大切にされているといった被受容感も抱きやすいと推測される。

また、男性の方が女性よりも自己主張の得点が有意に高く、女性の方が男性よりも持続的対処・根気の得点が有意に高いことが示された。このことは、男性は集団のリーダーになることが求められており、状況に応じて自己の考えをはっきりと主張する表現方法が重視されている一方で、女性は調和のとれた人間関係を形成し、維持することが求められ、そのための表現方法が重視されている（Malts & Borker, 1982）ことに関連していると考えられる。

2) 出生順位

分散分析の結果、中間子は一人っ子よりも特定他者からの被受容感が高いことが示された。中間子とは、複数のきょうだいの中で長子と末っ子の間に生まれた子、上と下にきょうだいをもつ子と定義できる。生まれたときに年上のきょうだいが存在している点では末っ子と共通し、何年か経つと年下のきょうだいの出現を経験するという点では長子と共通している。きょうだい関係に関する体験を量・質ともに豊富にもっていることで、一人っ子と最も対照的である。きょうだいから被受容感を得られた経験が広がりを見せ、特定他者からの被受容感、つまり、「…な人がいる」というように、現在の友人や恋人といった受容してくれる他者の存在を感じやすくさせているものと推測される。

さらに、社会的自己制御に関して、長子は末子よりも感情欲求抑制が高いことが示された。長子は人生の最初には両親の愛情と関心を独り占めできるが下の子が生まれると、親を独占できないことに気づく。そして、「自分は兄・姉である」という意識が育ってくると、下の子を許すようになり、養護する気持ちになる。自分を押さえて下のきょうだいに対し、兄・姉の役割を果たそうとするようになり、素直・控え目・慎重など落ち着いたきのある人格を形成すると言われる（白差，2004）。そのため、長子は、きょうだいの中で最後に生まれ対照的な位置にある末子よりも感情欲求抑制が高いものと推測される。一方、末子は他の子どもよりも多く親から甘やかされることから、甘えん坊であり、一般的に人格面の弱さが指摘されている。大人に手をかけられるという点では、長子の場合とほとんど変わらないが、下にきょうだいができないことがないので、この甘やかしの環境はいつまでも続くのである。常に家族の最年少者として注目・関心を集め、決して王座の地位を奪われることはない。こうした環境が感情や欲求を抑制する必要性を末子に抱きにくくさせているのだろう。

3) 異性きょうだいの有無

*t*検定の結果、異性きょうだいがいない人（同性のみ）の方が異性きょうだいのいる人よりも自己主張の得点が高い傾向にあることが示された。この結果は先行研究である藤田（2006）の報告とも一致しており、自己主張の高さには異性きょうだいの有無が関係していることが明らかとなった。同性同士の構成の方が異性を含んだ構成よりも関係が親密になる可能性が高く、依存的な性格が強くなる一方で主張性も高くなると予想される。

また、性別構成は、特に異性との関わり方に影響を及ぼすと考えられる。本研究では扱わなかったが、異性に対する自己主張にも異性きょうだいの有無による何らかの差異がみられるのではないだろうか。

4) きょうだい数

分散分析の結果、きょうだいが3人以上いる人は、一人っ子よりも特定他者からの被受容感が高いことが示された。これは、出生順位のとときと同様、きょうだい関係に関する豊富な体験が、特定他者からの被受容感を感じやすくさせているものと推測される。また末岡（1981）は、一人っ子の特徴として両親からの関心と愛情を独り占めにし、大人だけの環境に全面的にさらされているため、知的発達や運動発達において有利な立場にある一方、情緒的成熟の面では不利であることを挙げている。一人っ子の被受容感が低い原因として、情緒的成熟が十分でないことも挙げられるのではないだろうか。

(3) 自尊心および被受容感・被拒絶感と社会的自己制御との関連

1) 自尊心、被受容感、被拒絶感と社会的自己制御との関連

自尊心、被受容感、被拒絶感を独立変数とし、自己主張、持続的対処・根気、感情欲求抑制を従属変数とした3要因分散分析を行ったが、有意な二次の交互作用が見られなかったために、「自尊心が低く、被受容感が高い人は、自尊心が高く、被受容感が低い人よりも社会的自己制御が高い」という仮説は成り立たなかった。ただ、いくつかの主効果が見られた。自己主張、持続的対処・根気においては、被受容感の高い人の方が低い人よりも得点が高いということがわかり、一方で、被拒絶感の低い人の方が高い人よりも持続的対処・根気、感情欲求抑制が高いということが判明した。

こうした結果となった要因として、相関の結果からも見てとれるように、自尊心ではなく、被受容感・被拒絶感が社会的自己制御に強く影響を及ぼしていると考えられる。つまり、「自己」の精神内界の話に留まる自尊心よりも、「自己と他者のつながり」を想定する被受容感・被拒絶感のほうが、社会的場面における対人関係スキルである社会的自己制御には直接的に影響を与えているのである。このことはRosenberg（1965）の自尊心尺度の項目を見る限り、他者と比較した自己についての言及はあるものの、自己と他者あるいは社会との関係のあり方について言及した項目はないことから明らかだろう。

また、相関の結果からも述べたように、自尊心尺度の項目内容が抽象的で調査対象者に伝わりにくかったことも自尊心と社会的自己制御の関連が見られなかった要因であると考えられる。よって自尊心の構造について概念整理も必要であろう。いわゆる「自尊心」のなかには、少なくとも「誇り、自信」、「自己受容」、「優越感」の質的に異なる要素が含まれていることが指摘されている（伊藤，1994）。個々の要素が社会的行動に対して別々に異なる影響を与えることが実証されるならば、これらを明らかに分離できるような新しい尺度を開発することが必要となるだろう。

また、被拒絶感に関していえば、高群の方が低群よりも持続的対処・根気、感情欲求抑制が低かった。尺度を作成した原田ら（2008）は、持続的対処・根気、感情欲求抑制を、社会的自己制御の自己抑制的側面として、同一の側面に位置づけている。よって、他者に疎まれる、嫌がられる、といった過剰な分離意識を抱くことで自己への執着や自己絶対化を生じさせ、自己抑制のできていない状態である自己中心的でわがままな依存行動をとってしまうのではないかと考えられる。このことは、孤独感を感じるものは、社会性が未熟で、独善的な生活態度や人生態度を発展させる傾向があるというCheluneら（1980）の報告とも類似する。

2) 特定他者からの被受容感、特性的被受容感、被拒絶感と社会的自己制御の関連

特定他者からの被受容感、特性的被受容感、被拒絶感を独立変数とし、自己主張、持続的対処・根気、感情欲求抑制を従属変数とした3要因分散分析を行った結果、いくつかの主効果や一次の交互作

用が見られた。

まず、主効果に関して述べると、自己主張、持続的対処・根気では特定他者からの被受容感が高い人の方が低い人よりも数値が高かった。また、持続的対処・根気、感情欲求抑制においては被拒絶感の低い人の方が高い人よりも高かった。このことから、自己主張、持続的対処・根気は被受容感のなかでも、特定他者からの被受容感と関係していることが分かる。具体的に自分を受け入れてくれるだれかを思い浮かべられることで、安心して自分の思いが表現できているのだろう。また、友達や家族に支えられている実感がレジリエンスを高める (Silva, Vaz & Areias et al., 2011) といった指摘もあることから、「状況や欲求に左右されることなく一つのことを長く続けて行う」といった持続的対処・根気には身近な他者からの被受容感が深く関係しているといえるのではないだろうか。被拒絶感の低さが持続的対処・根気、感情欲求抑制に優位に働くことは、先程、自尊心、被受容感、被拒絶感と社会的自己制御との関連で述べたように、他者に疎まれる、嫌がられる、といった過剰な分離意識が高まると他者の意見を受け容れようとはしない自己の絶対化を生み、自己抑制を困難にしていると考えられる。このことは、そうした人が実際の他者との関係がどうであろうと、他者が自己を否定的に見ていると思い込んでいるということの意味しているのではないだろうか。このような人に対して、「そのように考える根拠は何なのか」「他にはこういう考え方もできるのではないか」といった自分の思考や感情を客観的に見るための支援が必要になってくると思われる。

次に、自己主張と感情欲求抑制において、特定他者からの被受容感と特性的被受容感との間に有意な一次の交互作用が見られ、特定他者からの被受容感が高い人のなかで、特性的被受容感の高い人は低い人よりも自己主張、感情欲求抑制が高く、さらに特性的被受容感の高い人のなかで、特定他者からの被受容感の高い人は低い人よりも自己主張、感情欲求抑制が高かった。このことから、両方の被受容感を高めることで、自己主張、感情欲求抑制はさらに理想的なものへと近づくことが推測されるだろう。

自己主張と感情欲求抑制には特定他者からの被受容感と特性的被受容感との間に有意な一次の交互作用が見られた一方で、持続的対処・根気についてのみ特定他者からの被受容感と特性的被受容感との間に有意な一次の交互作用が見られなかった。自己主張、感情欲求抑制は、「誰に対して」という前提がある点で直接対人的であるが、「困難なことでも集中して取り組む」といった持続的対処・根気は、行為の対象が人ではなく、課題や状況であることも多いため、他者に対し課題の遂行や状況の打開を通して間接的に働きかけるものである。よって他者との相互作用が直接的であるか間接的であるかによってそれを支える被受容感の度合いも異なってくると考えられる。

最後に自己主張に対して特性的被受容感と被拒絶感との間にも有意な一次の交互作用が見られたことについて述べていく。ここでは拒絶感の低い人のなかで、特性的被受容感の高い人は低い人よりも自己主張が高かった。

「拒絶されていない自己」という認知は他者から自己へ向けての一方的な評価に関する認知である。社会的自己制御における自己主張の指すものが「相手から適切な態度や行動を引き出すという目的をもって、正当な理由に基づいて自分の立場や考えをはっきりと相手に伝えることであり、単に大声や大げさなパフォーマンスで目立ったり我を通したりすることではない」ということを加味するならば、ここでの自己主張は相互理解の上に成り立っているといえる。そこで、他者から自己へ向けての一方的な評価だけでは自己主張を高めるに十分ではないが、ここでおかつ、他者を特定しない、より一般化した日常場面における受容感を感じると、自分は他者と広くわかりあえるといった双方向的な感

覚を持つことへとつながり、自分の意見や欲求を他者に伝え易くしているのではないだろうか。

5. まとめ

(1) 被受容感のもつ2側面について

因子分析の結果、これまで一義的にしかとらえられていなかった被受容感に、異なる2つの側面があることが明らかとなった。特性的被受容感は先行研究の被受容感とほぼ同義であるが、特定他者からの被受容感について検討した研究は見当たらない。その存在は今後さらなる検討を重ねることが必要であろう。本研究の結果から、特定他者からの被受容感は自己主張や持続的対処・根気を直接的に高める要因となることが明らかとなり、その重要性が示された。ゆえに、特定他者からの被受容感を高める要因についても探る必要があると考えられるが、本研究では出生順位やきょうだい数がそれと関連しており、きょうだい関係に関する豊富な経験によって、特定他者からの被受容感が高まることが推測される。

(2) きょうだい構成と社会的自己制御

t検定・1要因分散分析の結果から、長子の方が末子よりも感情欲求抑制が高く、異性きょうだいがいない人はいる人よりも自己主張が高かった。出生順位と異性きょうだいの有無によって社会的自己制御に差が見られた一方、きょうだい数による社会的自己制御の差は見られなかった。このことから、社会的自己制御の高さにはきょうだいの質と量で考えるならば、質の方が関連していると推測される。しかしながら、本研究の調査対象者中、一人っ子は23人と、全体の1割程度にしか満たなかったことがきょうだい数と社会的自己制御の関連の見られなかった要因である可能性も考えられる。よって、より明確な関連性追求のためには一人っ子の数を増した調査を行う必要があるだろう。

(3) 自尊心と被受容感、社会的自己制御の関連

3要因分散分析の結果、人間関係での適応感である被受容感を得ている人は自尊心に関係なく、社会的自己制御が高いことが分かった。これにより、社会的自己制御の育成には被受容感の役割が大きいことが示唆される。

また、社会的自己制御の3つの下位尺度についてそれぞれ見ると、被受容感の高さが自己主張、持続的対処・根気、感情欲求抑制の高さと関連していることは前にも述べた通りであるが、それ以外にも、直接対人的な行動である自己主張と感情欲求抑制は特定他者からの被受容感と特性的被受容感の双方を高めることでより適切なものとなることや、自己抑制的側面である持続的対処・根気と感情欲求抑制の高さには被拒絶感の低さが直接関連していることが分かった。このことから、社会的自己制御以外にも、直接対人的と考えられる社会的スキルには2つの被受容感をともに高めることや、自己抑制的な社会的スキルには被拒絶感を下げることが有効に働くのではないだろうか。

引用文献

- 相川充 (2010) 「きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』 61 (1),91-105.
- Chelune,M.E.,sultan,F.E., & williams,C.L. (1980) 「Loneliness,self-disclosure and interpersonal effectiveness.」『Journal of counseling psychology』 27. (5),462-468.
- 伊藤忠弘 (1994) 「自尊心概念及び自尊心尺度の再検討」『東京大学教育学紀要』 34,207-215.
- 河野莊子・岡本英生 (2001) 「犯罪者の自己統制, 犯罪進捗及び家庭環境の関連についての検討」『犯罪心理学研究』 39,1-13.
- Malts,D.N., & Borker,R.A. (1982) 「A cultural approach to male-female miscommunication.」『In John J.G. (Ed.) Language and social identity.』 195-216. Cambridge,MA:Cambridge University Press.
- Rosenberg M. (1965) 『Society and adolescent self-image.』 New Jersey:Princeton University Press.
- 佐藤淑子 (2003) 『イギリスのいい子日本のいい子ー自己主張とがまんの教育学ー』 中公新書
- Schmeichel,B.J., & Baumeister,R.F. (2004) 「self-regulatory strength.」In R.F. Baumeister & K.D.Vohs (Eds.), 『Handbook of self-regulation:Research,theory,and applications.』New York:Guilford.』 84-98.
- Silva,A .M .,Vaz,C.,Areias,M .E.,et al. (2011). 「Quality of life of Patients with congenital heart diseases.」『Cardiology in the Young 』 21 (6),670-676.
- 白差俊憲 (2004) 「きょうだい関係とその関連領域の文献集成, 論述紹介編」川島書店
- 末岡一伯 (1981) 「子どもの人格発達ときょうだい関係」西 勇・小田切 正編著『子どもの発達と教育改革』 北海道大学図書刊行会
- 杉山崇 (2002) 「抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究」『心理臨床学研究』 19,589-597.
- 杉山崇・内田宏明 (2004) 「学校カウンセリングにおける機能的な心理福祉アプローチについてある中学生の被受容感へのアプローチと現実的アプローチの論考」『長野大学紀要』 26,41-48.
- 杉山崇・坂本真志 (2006) 「抑うつと対人関係要因の研究ー被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討ー」『健康心理学研究』,19, (2),1-10.
- 鈴木真吾 (2005) 「自尊心と被受容感からみた思春期の適応理解ーストレス反応・本来感との関連ー」『日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集』 107-108.
- 寺島瞳・小玉正博 (2007) 「他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討」『パーソナリティ研究』 15 (3), 313-322.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008) 「社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成: 妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連」『パーソナリティ研究』 17 (1),82-94.
- 和田実 (1998) 「大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康の涵係ー性差の検討ー」『実験社会心理学研究』 38 (2), 193-201.